

羽須美村は究極のエコビレッジをめざせ

中山間地域分科会 井上正一、岩本浩二、大内茂※、勝部祐治※、幸前徹※、田中隆一※（副幹事・とりまとめ）、野津衛、藤井俊郎※（幹事）、山村賢治※
（五十音順 ※は羽須美村への視察参加者）

視察実施日：平成14年10月18日（金） 羽須美村役場産業開発課 三上課長による現地案内、説明を受けた

1. はじめに

羽須美村は、島根県と広島県の県境にある、人口わずかに2000人ほどの村である。高齢化率は47.5%にもなり、全国で第7位、中山間地域の中でも、高齢化がかなり進行している自治体である。

村の立地は、国道54号を広島へ向かい、県境付近で西に入ると、江の川に沿ってこぢんまりとした集落が現れる。美しい棚田を有する静かなたたずまいの村である。

本年度の中山間地域分科会では、数年前にも羽須美村をとりあげているということなどから、ここを研究の対象として選ぶこととした。中山間地域の典型とも言える羽須美村について、現地の視察、村役場の方の話、地元の方の話などから、様々な課題を知り、よいところを発見するとともに、羽須美村の村づくり、地域おこしに、なんらかの提案をしようという趣旨である。



2. 羽須美村の現状について（視察参加者から）

○立地条件

- ・ 道路アクセスからいうと「陸の孤島」と言わざるを得ない。（勝部）

○村の雰囲気、魅力

- ・ 美しい山や川おいしい食べ物とお酒、そして人が魅力（勝部）
- ・ 蔵の大きな民家が山のふもとに佇んでおり、とても落ち着ける（勝部）
- ・ 桃源郷とっていいかもしれない。俗世間を離れ心豊かな生活を求めるには格好の場。（幸前）

○村の将来像

- ・ このまま推移すると今後10年で人口は半数近くにまでなるのではないか。現在耕作されている棚田も半分程度しか作付けできなくなる恐れがある。（幸前）

○福祉施策・高齢者施策

- ・ 健康診断などの福祉施策を強化していることは評価できる。（陶山）
- ・ 高齢化が著しく活力のない村だと思っていたが、年をとっても元気にする村、という高齢化の新たな見方を知った。（大内）
- ・ 全国的にも有数の高齢化率でありながら、多くの人が健康で豊かな生活を現役で送っていることを知り、現代社会における真の幸福とはなにか考えさせられた。（山村）
- ・ 高齢化を深刻な問題としてではなく、高齢者対策を十分に実施した成果として捉えている。90才以上が55人であるが、その半数はねたきりになっていない。人生の最後まで生きがいや自己実現の喜びを感じることができるよう支援する、という村役場の姿勢には本当のやさしさを感じた。（藤井）
- ・ 人口をとにかく増やそう、若者を増やそうとしゃかりきになっている自治体が多い中、お年よりが安心してすごせる地域しようという考えには共感した。福祉施設に積極的に投資するという考えも、正しいあり方と思う。（田中）

○産業

- ・ 農業が基幹とっていいのではないか。（勝部）

- ・ 就職先がなく、Uターンする場合には村役場ということになるらしい。建設業といくらかの宿泊業が村の産業のよう。産業育成は課題だと思う。(幸前)
- ・ 村のキャパシティが低いことは認識しているが、それを改善していこうという意識は薄いのでは(陶山)
- ・ たばこ、水稻、野菜などを耕作して年間400万円程度の収入(経費は除く)は見込めるよう(陶山)
- ・ 産業としては特段の施策がないのではないか。観光も産業振興のメインという感じではない。(大内)

○棚田・農業

- ・ 棚田オーナー制度には平成14年度は9組が参加(そのうち広島からが8組)。1区画約100平米で、年間39000円を参加者が負担。平成11年度からの取り組みだが、着実に村のファンが増えており、外からの人がくることによって、地区が生き生きしてきている。(藤井)
- ・ 棚田オーナー制度は見習うべきところが多い。(陶山)
- ・ 減反施策によって、農業が疲弊している現状がある。他の方策はないか。(大内)

○鳥獣問題

- ・ 効果的な鳥獣対策がないため、被害により農家の生産意欲の低下につながっている。その結果、お年よりの中には家に閉じこもり、呆けるような人も出てくる。(陶山)
- ・ 鳥獣問題は、村の大きな問題のひとつ。電気柵などによって被害防止をしているが、あまり効果があがっていないよう。早急な解決が必要。(藤井)

3. 魅力的な村づくりへのメッセージ(視察参加者から)

- ・ 少しずつ羽須美村ファンを増やしてください。私達も協力したいと思います。(勝部)
- ・ 一定数の羽須美村へのリピーターによる継続的な交流が基本ではないか。(幸前)
- ・ 棚田での農業は、観光化された農業や都会生活のストレスを癒す観光農業、健康農業によってしか維持できないのではないかと(幸前)
- ・ 空き家が増えているということだが、うまく利用する施策を考えてはどうか。(陶山)
- ・ 少子高齢化は避けることができない課題であるが、健康診断や生涯学習プログラムの充実などを計画的に実施してきた村役場の保健行政は大いに評価されるべき。(山村)
- ・ 地域振興の基本は、おかれた環境の中で住民の安全と生きがいをいかに実現させるかであり、ハード面の整備は最低限度でよい。(山村)
- ・ 多くの人は、羽須美村を過疎の進んだ極めて深刻な村というイメージを持っていると思うが、説明を聞いているうちに、村民の多くは幸せを感じ、誇りを持って、この村に住んでいるのではないかと、思うようになった。(藤井)
- ・ もう少し羽須美村を外に向かってアピールする、売り込むという姿勢が強くてよいのでは。棚田オーナー制度は、広島の方に人気とのことだが、島根県の都市部の人々(松江や出雲など)にこそ、多く知ってもらいたいと思った。(田中)
- ・ 棚田の活用については、鳥取県智頭町の新田集落の件が参考になると思う。集落で、浄瑠璃公演、都市との交流、カルチャー講座の3本柱を主体とした活動を進め、地区の活力としている。NPO組織もつくっているとのこと。(大内)

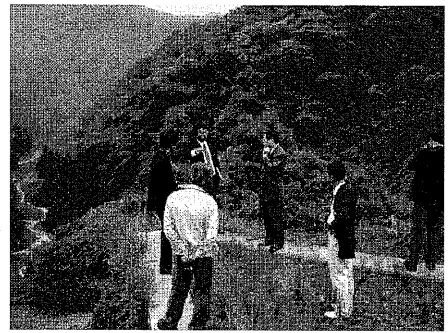
4. 棚田を生かした究極のエコビレッジを目指して

- ・ 羽須美村では「自然回帰の村づくり」を掲げているが、技術士会中山間地域分科会では、これを一步進めて「究極のエコビレッジ」を目指す提案を試みたい。その提案の核となるのは、やはり「棚田」である。棚田を活かしながら、エコロジカルできらりと光る村づくりについて提言を行う。

1) 棚田を気持ちよく見て巡る仕組み

○棚田めぐりレンタル電動カーシステム

- ・ 曲がりくねった細い坂道をあがっていくと、ふいに棚田の風景が現れる。その瞬間は感動的でもある。棚田へのアプローチを、電動カー（最近、100万円程度で売りに出されている電動チャロQなど）を村の中心部でレンタルする仕組みつくってはどうか。2時間3000円程度で貸せば、需要も、反響も大きいはず。静かで、廃棄ガスがなく、環境にやさしい。エコビレッジのシンボルになる。



○棚田巡り散策路の整備

- ・ 棚田のブロックごとにハーブを植えて、それを巡回する散策コースを設ける。散策路には、休憩のためのベンチや道しるべなどを整備し、気持ちよく散歩できるような環境をつくる。

2) 棚田オーナー制度を進化させる

○電子棚田オーナー制度

- ・ 遠距離オーナーに対して稲の生育状況や田植え、稲刈りの状況をインターネットにより情報提供し、稲刈り後は、その米をオーナーに送る仕組み。遠距離に住むオーナーは直接、羽須美村まで来て作業をするのが難しいため、棚田に区画を割り、電子オーナーとして募集する。インターネットで、農業の疑似体験をすることができるとともに、お米に愛着を持つことができる。

○棚田地図の作成とオリジナル命名

- ・ 棚田の1枚1枚にインターネットにより命名者を募集し、命名料金を徴収する。期間は1年として、毎年更新する。

3) 棚田米の商品化とPR

○棚田米の様々な販売方法の開発

- ・ 一般的に、米は5キロを最低の量に販売されているが、棚田米はとて希少であることから、1キログラム程度の小さな単位にして、国道54号沿いの道の駅などで、お土産用に販売する。夕ごはん家族4人が食べられる程度の量である。小分けにすることによって、PR効果が期待できる。

○棚田酒の醸造、販売

- ・ 羽須美村には地酒である「蛍の舞」があるが、とても旨いお酒である。棚田の米を使ったお酒「棚田酒」を醸造、販売することによって、羽須美村を大きくPRすることができる。

4) 棚田耕作の継続性確保

○学生耕作隊

- ・ 山口大学の学生が、昨年より開始した仕組みで、農繁期に、春休み、夏休みに、まとまった休みのある学生の手を農家に利用する。学生、農家とも登録制。これを参考に、島根版学生耕作隊を結成し、島根大学や島根県立大学の学生などに羽須美村に来てもらう。
- ・ 県外出身者が島根にきた学生も、卒業後は、多くが県外に出てしまうが、そのひとつの要因は、島根のよさを知らずに、大学だけの生活を送るからではないか。島根の中山間地域の暮らしを知ることがきっかけに、少しでも若者の島根定住に役立てることができないか。

5) 棚田の新しい価値づくり

○棚田イベントの実施

- ・ 棚田の風景はローマのコロッセウムを連想する。この風景を会場に見立て、様々なイベントを開催する。
- ・ 棚田の撮影会、写生大会、棚田を観客席にしたロックコンサート、野外映画の開催。

○体験交流のための民家宿泊システム

- ・ 現在では、羽須美村の「村らしさ」を満喫できるような宿泊施設がない。空き家の活用や、一般の民家を民宿にしていくなどし、棚田体験とセットにして羽須美村を満喫してもらう。

5. 付録：鶏舎跡地の利用について（村役場から分科会のメンバーへ意見を求められた）

- ・ 村の雪田地区には養鶏団地があったが、養鶏業者が廃業したため、幅12M×長さ88Mの10棟の鶏舎が空きとなった。現在、その跡地と鶏舎は村の所有となっており、その活用策について意見を求められた。

<基本的な考え方>

- ・ 10年後に生かされているかという視点に立ち、村のイメージアップにつながる（幸前）
- ・ 企業ないし、資金的な裏付けのある有力な個人による利用を図り、第3セクターは採用しない（幸前）
- ・ 冬季の積雪の影響は考慮しなくてよいが、三次インターまでは45分、広島まで1時間半、松江まで2時間15分という立地は生かしようがある。（幸前）
- ・ 民間活力をいかし、マイナスイメージの少ないもの。鶏舎は活用する。（陶山）
- ・ あまりの規模の大きさと鶏舎内の残骸に愕然とした。（藤井）

<具体的なアイデア>（参加者全員から）

- ・ ハウス野菜、ハウス果樹、薬草 ・ 自然溪流を生かした岩魚の養殖
- ・ 鴨や合鴨の飼育 ・ 受刑者の更正施設 ・ 自衛隊の訓練所 ・ 弓道、相撲、柔道等の合宿所
- ・ 倉庫（木材、その他） ・ 管理型の廃棄物保管施設 ・ 射的練習所
- ・ ラジコン飛行機の実験施設 ・ 屋内モトクロス場 ・ 雪の貯蔵庫
- ・ 巨大迷路 ・ 養鶏産業のすさまじさを体験する施設（アンネの部屋のような）

<施設利用の実施の方法>

- ・ 業資金の融資の貸し付け・保証や技術者による指導を仰ぐことなどによる村のバックアップ（幸前）
- ・ これだけの施設の規模を一括して利用することはリスクも大きいため、利用用途に応じた段階的な利用拡大を目指すべき。（幸前）
- ・ この場所をホームページで公開して、使い方を公募する。公募ガイド（雑誌）に掲載することも。第一歩は、この場所と施設をわかりやすく紹介したパンフレットをつくり、あちこちへ営業活動をする。（田中）

6. おわりに 技術士会と羽須美村の第一歩

- ・ 今回の、羽須美村視察を、分科会のメンバーの勉強に終わらせるのではなく、これをきっかけにして、さらなる交流や、村の多くの方へ向けたメッセージ、提案を試みていきたい。

<羽須美村の魅力的な村づくりに向けて>

- ・ 今回の提案（本レポート）を携え、羽須美村の方々（とくに民間の方）と、再度交流の機会を持ちたい。（島根県景観アドバイザーで羽須美村在住の中村氏（一級建築士）より実際に声がかかっている。）
- ・ 本レポートを編集し、村の方々へ配布することはできないか。
- ・ 勉強ではなく、誰もが楽しみに羽須美村へ行くという機会を持つ。棚田見物、カヌー体験など。
- ・ 今回は、日程の都合がつかなかったが、島根大学の飯野先生が羽須美村に共同所有されている古い民家へ泊まりに行く。
- ・ 棚田オーナーへの平成15年度応募を思案中（田中隆一）。

<空き鶏舎の活用について>

空き鶏舎の活用策については、分科会メンバーの意見以外に、他の技術士会会員の意見や、他県の空き鶏舎の活用事例等を踏まえて、とりまとめて羽須美村に送付した。他県の活用事例には、養鶏を継続した事例、空き鶏舎を取壊しとりあえず更地にした事例等があった。送付した意見は、まず、やる気のある主体を広範に探すことを前提とした。その上で、養鶏継続案、高齢者のための工房等の整備案、その他複数の活用案を提案した。さらに、重要な視点として、もし実施主体が見つからない場合や、多額の財政投入が必要となる場合は、当面の活用を保留し長期的に主体探しに努めることも大切であることを付け加えておいた。

以 上